

平成 27 年度  
長岡市内遺跡発掘調査報告書

2016

新潟県長岡市教育委員会

平成 27年度  
長岡市内遺跡発掘調査報告書

2016

新潟県長岡市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、長岡市内で計画された開発工事に先立つて実施した試掘・確認調査、開発工事中に実施した立会調査、そして長岡市独自で実施した分布調査の報告である。
2. 調査主体は長岡市教育委員会科学博物館である。
3. 本文の執筆は、新田（1・7）、山賀（2・3）、島居（4・5・6）で分担し、編集は新田が行った。
4. 遺物番号は道路ごとの通し番号である。
5. 土層柱状図における■は遺物包含層を示す。
6. 出土遺物や写真及び測量図面などの記録類は長岡市教育委員会が保管している。
7. 現地調査から本書の作成に至るまで多くの方から御協力、御教示を賜った。記して御礼を申し上げる（五十音順・敬称略）。  
株式会社大石組　川東中央園場整備協議会　十日町コミュニティセンター学習部会郷土史を学ぶ会  
長岡砂利採取販売協同組合　新潟県長岡地域振興局農林振興部農地整備課　新潟県教育庁文化行政課  
石坂圭介　駒形敏朗　高野雅章　竹部佑介　田中博明

## 目　　次

1 平成 27 年度長岡市内遺跡発掘調査の概要	1
2 大荒戸前田遺跡確認調査	3
3 岩村室跡分布調査	4
4 上除地区試掘調査	8
5 杉木遺跡確認調査	9
6 白倉館跡確認調査	10
7 延命寺地区立会調査	12



第 1 図　長岡市の位置



写真 1　調査風景（上除地区）

## 1 平成 27 年度長岡市内遺跡発掘調査の概要

平成 27 年度に長岡市教育委員会が実施した遺跡の試掘・確認調査は 4 件である。このほか、諸開発に伴う立会調査を 8 件実施した（平成 28 年 3 月 1 日現在）。平成 24 年度以降、試掘・確認調査件数は横ばい傾向が続いているが、今年度は減少している。一方、立会調査の件数は例年並みであった。総じて、平成 25 年度以降は市内中心部での調査件数が多く、その傾向は今後も続くと予想される。

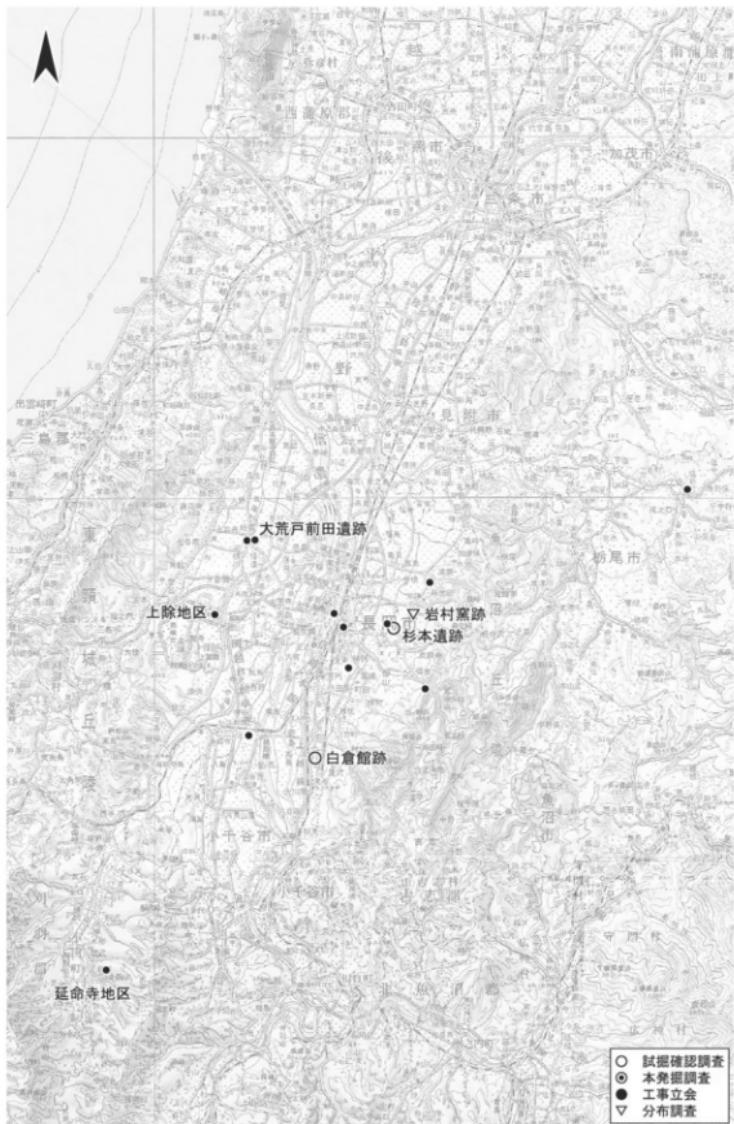
本年度実施の調査について概観したい。試掘・確認調査 4 件のうち、遺構や遺物が検出されたのは 2 件である。県営ほ場整備事業川東中央地区に伴う杉本遺跡の確認調査では、遺物の出土はなかったものの、ピットを検出した。事業者と協議した結果、遺跡保護のための工法変更がなされている。陸砂利採取事業に伴う白倉館跡での確認調査では、周知の遺跡範囲外で石組井戸を検出した。同時に検出した堀跡とともに注目される遺構であり、今後、遺跡範囲を含め、白倉館跡を検討していく上で重要な資料になるだろう。この石組井戸と堀跡を含めた遺跡範囲は、事業者との協議により掘削範囲から除外され、現状保存されることとなった。

立会調査のうち、県営ほ場整備事業上岩田地区に伴って実施した調査では、延命寺が原遺跡において、縄文時代後期～晩期の土器群と石器群が出土した。延命寺が原遺跡では、昭和 41 年からの開田工事に続く 2 度目のは場整備事業が実施されたことになるが、平成 21 年に実施した試掘調査から約 5 カ年にわたる協議を経て、縄文時代後期～晩期を主体とする良好な包含層を現状保存し、後世に伝えることができた。

岩村窯跡は、林道によって削出された崖面に露出する、窯体断面が観察されてきた遺跡である。分布調査によって遺跡の現況を確認したところ、崖面が著しく崩落していることを確認したため、窯体消失に備えて窯体断面の調査を行った。窯体の実測は岩村窯跡として初例となる。平成 28 年度には岩野原窯跡周辺での確認調査も予定されており、長岡における須恵器窯の様相が明らかになっていくことが期待される。開発行為に伴う調査を遺漏なく進めるとともに、学術的な調査を加えて、より厚みのある地域史を構築していくよう努めたい。

第 1 表 平成 27 年度長岡市内遺跡調査一覧（本書掲載の調査はゴシック体で示した）

地域	地区	調査原因	結果など
長岡	上条遺跡	土地区间整理事業	本調査 平安時代の柱穴/須恵器・土師器
	岩村窯跡	遺跡分布調査	分布調査 窯体/須恵器
	大荒戸前田遺跡	個人住宅建設	確認 遺物・遺構なし
	大荒戸前田遺跡近接地	保育園建設	立会 遺構・遺物なし
	栖吉前田遺跡近接地	携帯電話通信基地建設	立会 遺構・遺物なし
	杉本遺跡	県営ほ場整備事業	確認 ピット/遺物なし
	岩瀬遺跡	県営ほ場整備事業	立会 遺構なし/須恵器・土師器・珠焼
	上除地区	遺跡の有無の確認	試掘 遺構・遺物なし
	石ノ下遺跡	個人住宅建設	立会 遺構・遺物なし
	長岡城跡	集合住宅建設	立会 遺構・遺物なし
越路	白倉館跡	陸砂利採取事業	確認 堀・井戸/遺物なし
	石ノ下遺跡	個人住宅建設	立会 遺構・遺物なし
	長岡城跡	事務所建設（建替）	立会 堀か/遺物なし
	浦畠遺跡	墓園整備事業	本調査 土坑・溝/須恵器等
小国	延命寺地区	県営ほ場整備事業	立会 土坑/縄文土器・石器
棚尾	塙新町遺跡	河川改修	立会 遺構なし/縄文土器



第2図 平成27年度調査位置図 (1/250,000)

## 2 大荒戸前田遺跡確認調査

調査地 長岡市大荒戸町字南原 504 番地 3 調査面積 6 m<sup>2</sup> (対象面積 343.13m<sup>2</sup>)  
調査期間 平成 27 年 9 月 29 日 調査担当 山賀和也

**調査に至る経緯** 平成 27 年 6 月 10 日、個人住宅建設に係る埋蔵文化財の取扱いについて照会があった。照会地の一部には大荒戸前田遺跡の範囲が及ぶため、事業着手前に確認調査を実施する必要がある旨を伝え、合意を得た。調査は、事業の進捗状況に合わせて実施することとした。

**調査地の概要** 調査地は信濃川左岸の沖積地内の自然堤防上に位置しており、標高は約 19 m である。調査地の北側に大荒戸前田遺跡が広がっており、古代から中世の遺物が採集されている。

**調査の結果** 対象地に 2 × 3 m のトレーニングを 1 倍所設定し、バックホウと人力で慎重に掘削を行った。地表から約 100 cm は盛土されており、その下から旧耕作土と思われる暗灰色粘土と青灰色シルトが堆積していた。遺物、遺構は発見されなかった。そのため、事業計画地には遺跡が存在しないと判断し、工事に支障がない旨を事業者に伝えた。



第3図 調査位置図 (1/20,000)



第5図 土層柱状図 (1/60)



第4図 トレーニング配置図 (1/400)



写真2 完掘状況 (北から)



写真3 土層断面 (北から)

### 3 岩村窯跡分布調査

調査地	長岡市乙吉町字岩村	調査面積	—m <sup>2</sup> (対象面積—m <sup>2</sup> )
調査期間	平成 27 年 4 月 21 日	調査担当	山賀和也

**調査地の概要** 本窯跡は、信濃川右岸で東山丘陵から派生する東西に舌状に延びる丘陵中央部の南側斜面中腹に位置している。周辺には、古代の須恵器の窯跡がいくつか存在している。本窯跡の南に間野窯跡が位置する。間野窯跡は、発掘調査されており 2 基の窯体が発見されている。出土遺物の中には佐波理と呼ばれる椀や皿の金属器を模倣した須恵器があり、官衙に供給していた可能性がある。時期は 8 世紀第 2 四半期頃が考えられる。中野内遺跡は、当初は間野窯跡の工人集団の集落の可能性が指摘されていたが、確認調査で窯体が発見され窯跡であることが判明した。窯体からは須恵器が多量に出土し、灰原が確認されなかったことから操業途中で窯が崩落した可能性が高いと考えられる。時期は 8 世紀第 4 四半期頃が考えられる。本窯跡の位置する沢の奥まったところに朴ノ木谷遺跡が位置する。確認調査の結果、焼土や灰層の広がりが検出され生焼けの須恵器などが出土したことから灰原に当たる部分と考えられた。窯体はすでに削平され失われているものと考えられる。時期は 9 世紀前半頃が考えられる。

**遺跡の概要** 本窯跡は間野窯跡の調査に伴い発見された遺跡で、その後林道の拡幅工事などで次第に南側斜面が削られ、灰原や焚口などはほとんど失われている。発掘調査は行われていないが、崖面に窯体断面が露出しており、『長岡市史』資料編〔長岡市 1992〕によれば 10 m ほどの範囲に等間隔で 3 基確認できるという。今回の調査は、最近崖面が大きく崩れたことによって今後窯跡が消失してしまう可能性があるため、急きよ断面実測を行った。また、『長岡市史』では西から順に 1 号～ 3 号と呼称し、1・3 号窯跡は床面が 1 面認められ、2 号窯跡は 2 面以上の床面が確認されている。今回の調査で記録した窯体は、他の 2 基について確認していないため『長岡市史』の中での何号窯にあたるのかは不明であるが、後述するように床面が 2 面確認されたことから 2 号窯の可能性があろう。

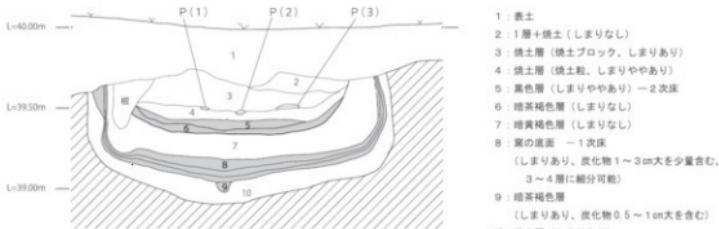
**調査の結果** 窯体は、半地下式で 2 面確認できる。古い方を 1 次床、新しい方を 2 次床として記述する。1 次床は幅が 170 ～ 180cm、表土下からの深さは 65cm で、断面形は隅丸の箱型を呈する。床面及び側面は、青灰色になっており、その外側の 10 層は被熱した地山で赤化している。床面の下で窯体の中央部に幅 10 cm、深さ 6 cm のピット状の窪みが確認できる。断面のみの調査であり詳細は不明であるが、温氣対策の排水溝の可能性があろう。排水溝を有する窯体の類例には、五泉市山崎窯跡〔五泉市教委 1981〕が挙げられる。山崎窯跡は排水溝に土器がフタとして被されている。しかし、本窯跡ではそのような土器は確認されなかつた。2 次床は、1 次床の約 20cm 上に造られており、幅は 140cm 程度とみられ、表土下からの深さ 30cm である。排水溝は確認できない。2 次床は、1 次床のように青灰色ではなく黒色土層であり、燃焼温度が低かつた可能性が考えられる。覆土は焼土であり、4 层上面から遺物が 3 点出土している。

今回の調査で採集された土器は 3 点 (1 ～ 3) である。いずれも 4 层上面からの出土であり、甕の胴部片である。しかし、2 次焼成を受けており赤褐色になっている部分が見られることから、焼台として再利用された可能性がある。4 ～ 25 は、『長岡市史』で掲載された遺物を再トレースし再録した。一部再実測も行った。4 ～ 8 は壺蓋である。4 は、扁平な獰宝珠形のつまみを持つ。7・8 は屈曲した端部がやや内側に入る。9 は有台壺で断面方形の高台が貼り付く。10 ～ 12 は無台壺である。10・11 は、口縁部で外に開く形態である。12 は、底部片で回転ヘラ切り後、縁辺部をナデ調整している。13 ～ 15 は長頸壺である。13 は肩部で丸みを帯びており、カキ目が施される。また、1 条の沈線が巡っている。14・15 は高台部で、外に広が

る形態で内端接地する。15は丸底の底部にやや長い高台が貼り付けられている。16・17は横瓶である。16は口縁部で、やや外に開く形態である。壺の口縁部の可能性もある。17は体部片で体部を閉塞した部分にある。外面には溝巻状のカキ目が施される。なお、外面に別個体の破片が付着している。18は壺蓋である。天井部及び端部が欠損しており詳細は不明である。19～25は甕である。19～21は口縁部資料である。19は体部から頸部がまっすぐ立ち上がり口縁部は大きく外反する。頸部外面には、6条の波状文が施される。20は口縁部が大きく外反し、端部は上方につまみ出される。外面に波状文を施す。21は外傾し口縁端部が下方につまみ出される。22～25は甕の胴部片である。遺物の時期は、細片のため明らかにすることは難しいが、8世紀代のものと9世紀前半頃のものが見られる。本窯跡の年代は、そのどちらかあるいは窯が複数基あることから操業期間が8世紀代から9世紀前半に及ぶ可能性もある。今後は窯の構造やその年代を明らかにしていくことと共に土器の供給先を明らかにしていくことが課題となろう。



第6図 調査位置図



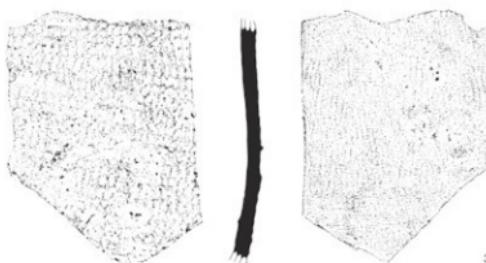
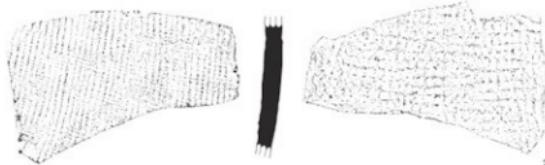
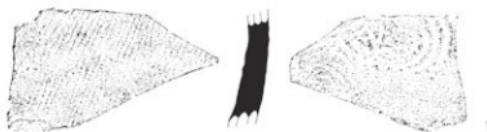
第7図 断面図 (1/30)



写真4 断面写真（南から）

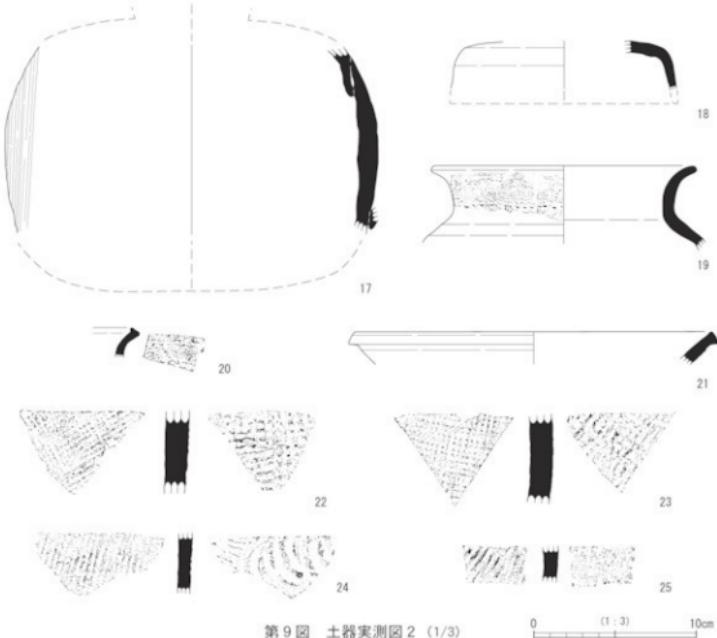


写真5 調査風景



第8図 土器実測図 1 (1/3)

0 (1 : 3) 10cm



第9図 土器実測図2 (1/3)

0 (1:3) 10cm

第2表 遺物観察表

(単位: cm)

No.	種類	胎種	口径	底径	色調(外/内)	始土	「市史」No.	備考
1	須恵器	甕	—	—	暗赤褐色/黒	長・チャ・黒	—	外: 平行タタキ、内: 同心円当て具
2	須恵器	甕	—	—	黒褐色/暗赤褐色	長・チャ・黒	—	外: 格子目タタキ、内: 格子目当て具
3	須恵器	甕	—	—	暗赤褐色/黒褐色	長・チャ・黒	—	外: 格子目タタキ、内: 格子目当て具・力矢目
4	須恵器	壺蓋	—	—	灰/黒	長・黒	1	
5	須恵器	壺蓋	16.7	—	暗灰/暗灰	長・黄・黒	2	
6	須恵器	壺蓋	14.4	—	黄灰/灰灰	長・黄・黒	3	
7	須恵器	壺蓋	14.8	—	黑褐色/黑褐色	長・チャ	4	
8	須恵器	壺蓋	16.7	—	灰/灰	長・海	5	
9	須恵器	有台杯	—	10.8	灰/灰	長・英・黒	7	
10	須恵器	無台杯	14.2	—	暗灰/灰	長・黒	8	
11	須恵器	無台杯	14.0	—	灰/灰	長・黒・海	9	
12	須恵器	無台杯	—	9.2	灰/灰	長・英・黒・海	10	底部回転・ハラ切り
13	須恵器	長頸瓶	—	—	灰/暗灰	長・黒	13	外: 力矢目・沈縫
14	須恵器	長頸瓶	—	8.4	灰/灰	長・英・黒	14	
15	須恵器	長頸瓶	—	10.8	灰/暗灰	長・黒	15	
16	須恵器	横瓶	14.9	—	灰/灰	長・チャ・黒	16	
17	須恵器	横瓶	—	—	灰/オリーブ黒	長・黄・チャ	17	
18	須恵器	壺	—	—	オリーブ黒/灰	長・チャ・黒	6	外: 自然縫
19	須恵器	甕	16.0	—	灰/灰	長・チャ・黒・海	11	外: 波状文
20	須恵器	甕	—	—	オリーブ黒/灰	長	18	外: 波状文・自然縫
21	須恵器	甕	22.1	—	灰/灰	長・チャ・黒	19	
22	須恵器	甕	—	—	灰/灰	長・チャ・黒	20	外: 格子目タタキ、内: 格子目当て具
23	須恵器	甕	—	—	灰/灰	長・チャ・黒	21	外: 格子目タタキ、内: 平行当て具
24	須恵器	甕	—	—	灰/灰	長・英	22	外: 格子目タタキ・力矢目、内: 同心円当て具
25	須恵器	甕	—	—	灰/灰	長	23	外: 平行タタキ、内: 同心円当て具・力矢目

※胎土: 石英(英)・長石(長)・チャート(チャ)・黑色粒子(黒)・海綿骨針(海)で表記す。

\*市史No.は、「長岡市史」資料編の掲載No.である。

## 4 上除地区試掘調査

調査地 長岡市上除町

調査面積 66.0m<sup>2</sup> (対象面積1,486m<sup>2</sup>)

調査期間 平成27年5月21日

調査担当 烏居美栄

**調査に至る経緯** 平成26年8月、上除町地内の市有地が埋蔵文化財包蔵地に該当するか、長岡市財務部管財課から長岡市教育委員会に照会があった。対象地は、かつて市営住宅地として利用された箇所であるが、縄文時代中期の集落である南原遺跡に近接している。協議の結果、平成27年度以降に試掘調査を実施して遺跡の有無を確認することとなった。

**調査地の概要** 調査地は、信濃川左岸の河岸段丘上、縄文時代中期の大集落とみられる南原遺跡（第10図）

1) の南西側に位置する。調査地の西側には菖蒲川が北へ流れ、対岸に上の沢遺跡(2)、転堂遺跡(3)、淨円寺山遺跡(4)など縄文時代の遺跡が所在する。調査地の建物は既に除却されているが、一部に通路のコンクリートや階段などが残る。調査地の東側の標高は約47m、西側は約45mである。

**調査結果** 任意の箇所に調査トレンチを9箇所設定し、バックホウで掘削を行った。いずれのトレンチからも造構・遺物は出土しなかった。8T以外の地山は円礫を多く含む黄褐色～橙褐色砂であった。調査地には遺跡は広がらないと判断した。



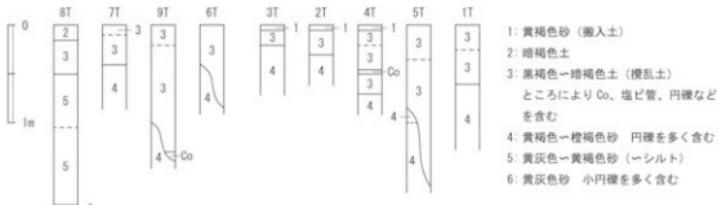
写真6 7T完掘状況 (北から)



第10図 調査地位置図 (1/20,000)



第11図 トレンチ配置図 (1/2,000)



第12図 土層柱状図 (1/50)

## 5 杉本遺跡確認調査

調査地	長岡市成願寺町	調査面積	16.25m <sup>2</sup> (対象面積 1,630m <sup>2</sup> )
調査期間	平成 27 年 4 月 27 日	調査担当	鳥居美栄

**調査に至る経緯** 平成 11 年、千代栄町とその周辺において県営は場整備事業が計画された。事業地には杉本遺跡など複数の周知の遺跡が所在しており、長岡市教育委員会は新潟県長岡農地事務所（当時）や地元の川東中央圃場整備協議会などと協議を行い、平成 13 年度に確認調査を実施した〔長岡市教委 2002〕。その成果をもとに遺跡の保護方法を協議した結果、遺跡への影響範囲は用排水路整備のための掘削部分のみとなった。掘削幅は 1 m 以内であり、随時、工事立会を行ってきた。平成 27 年 4 月、新潟県長岡地域振興局農林振興部（以下「事業者」という。）から、事業地内の換地の調整に伴って設計内容を見直したいとの連絡があった。杉本遺跡及び岩瀬遺跡が所在する範囲における耕区の境界変更と、杉本遺跡の一部における切土を検討しており、協議の結果、事業者から重機の提供を受けて確認調査を行うことになった。

**調査地の概要** 杉本遺跡は、信濃川右岸沖積地の自然堤防上に立地する古代の集落跡と見られる。千代栄町集落の北側に位置し、現状は水田、畑である。

**調査結果** 事業者が削平を検討する範囲の任意の箇所に調査トレンチを設定し、バックホウで掘削を行った。遺物は出土しなかったがピット 8 基を検出した。調査結果を事業者に伝え、協議した結果、杉本遺跡での切土は行わず、盛土により保護を行うこととなった。また、岩瀬遺跡については耕区の境界を変更したが、遺跡への影響がない設計内容となった。なお、杉本遺跡及び岩瀬遺跡における工事の設計変更について、事業者は平成 27 年 6 月 16 日付け長農振第 3147 号及び第 3148 号で文化財保護法第 94 条に基づく通知を行った。



第 13 図 遺跡位置図 (1/20,000)



写真 7 トレンチ完掘状況 (南東から)



第 14 図 トレンチ位置図 (1/5,000)・遺構確認状況図 (1/100)・土層柱状図 (1/30)

## 6 白倉館跡確認調査

調査地	長岡市十日町	調査面積	213.06m <sup>2</sup> (対象面積 7,800m <sup>2</sup> )
調査期間	平成 27 年 10 月 5 日・6 日	調査担当	鳥居美栄

**調査に至る経緯** 平成 27 年 9 月 7 日、陸砂利採取事業の計画地における埋蔵文化財の有無について、長岡砂利採取販売協同組合（以下「事業者」という。）から長岡市教育委員会に照会があり、協議を行った。計画地は白倉館跡に隣接しており、館の堀跡が所在する可能性があることから、確認調査を実施し、その結果に基づいて遺跡の保護方法を改めて協議することとした。確認調査は現地の稲刈り後に行うこととし、調査用の重機については事業者から提供を受けることとなった。

**調査地の概要** 白倉館跡は、『温古の集』十二篇「十日町の古城跡」の項や『越後野志』「十日町城」の項に記載される館跡で、信濃川右岸冲積地の自然堤防上、十日町集落の南はずれに所在するとされる。専福寺から南側の旧火葬場付近にかけて存在していたと伝えられるが、周辺は昭和 30 年ごろに土地改良が行われ、堀などの遺構を見ることはできない。調査地は専福寺境内の東にある水田で、標高は約 31 m である。

**調査結果** 任意の箇所に調査トレーンチを 8 箇所設定し、バックホウで掘削を行った。いずれのトレーンチからも遺物は出土しなかったが、一部のトレーンチにおいて中世の遺構のある落込みを検出した。

2 T・3 Tにおいて青灰色シルト～粘土を覆土とする落込みを確認した。確認面での東西幅は、2 Tでは 6.4 m 以上、3 T では 6 m。3 T では落込みの底部を確認し、深さは確認面から 35 ～ 40 cm である。地山は繊を含む黄褐色砂質土であり、落込みの底面の一部は青灰色を呈する。5 Tにおいては幅 6.7 m 以上の青灰色シルトの落込みを確認した。これらの状況から館の堀跡と判断し、その推定ラインは第 16 図のとおりである。一方、3 T・5 Tにおいて、前述の落込みの東側に暗青灰～青灰色のシルト・粘土の広がりを確認した。3 T では最大厚さが 20 cm あったが明確な掘込みは確認できず、遺構ではないとした。なお、3 T のその広がりの位置は、明治時代の地図籍で境内等を囲む幅 10 ～ 15 m の水田の位置にはほぼ一致する。

6 Tにおいて、暗青灰色シルト～粘土層を掘削中（深度 65 cm）、直径約 2 m の円形の落込みを検出した。覆土は暗青灰～青灰色の砂～シルトで、小石や長径 30 cm 前後の円礫が含まれていた。南側を深さ 15 cm ほど截ち割ったところ、落込みの内壁に円礫が並べられた状態で出土した。遺物が出土しておらず時期の特定には至らないが、中世の井戸跡の可能性がある。井戸跡が白倉館に伴うものであるかは不明であるが、これまでの遺跡範囲よりも北に遺跡が広がると見られる。

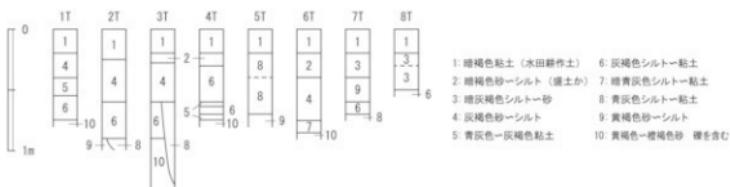
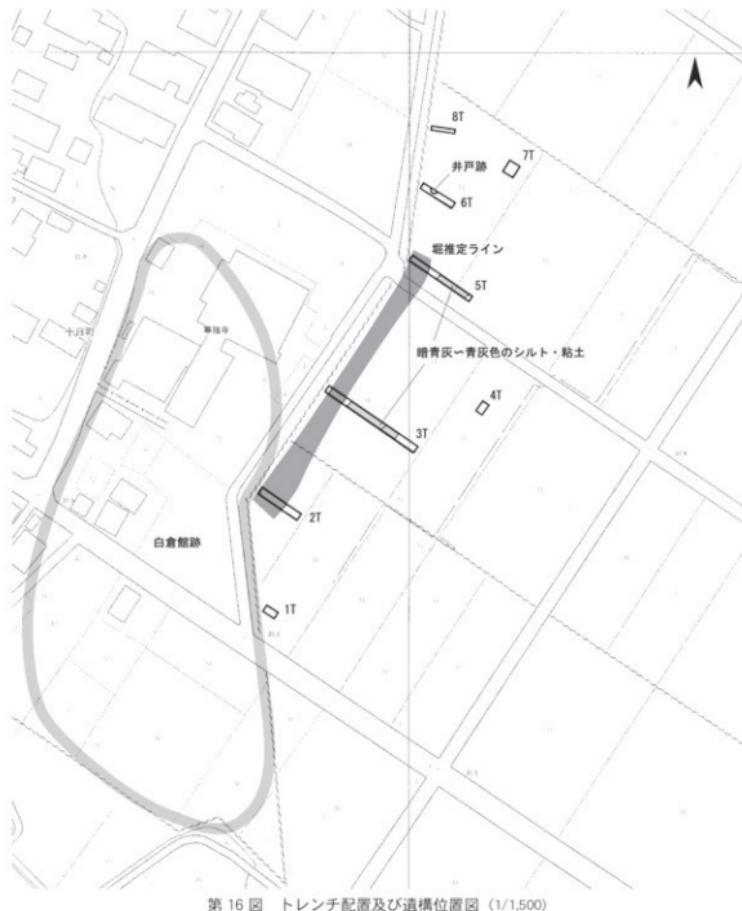
また、3 T・4 T・7 T の状況から、堀跡の東側には遺跡は広がらないと判断した。

調査結果を基に事業者と協議を行った結果、遺跡が所在する範囲は砂利採取事業の安全確保範囲に設定し、掘削範囲から除外することで合意した。砂利採取後の水田復旧工事についても遺跡に影響を与えない設計とすることになった。

事業者は今回の調査地以北でも砂利採取事業を予定している。今後、事業の進捗と調整して試掘調査を進め、遺跡の時期や性格、広がりなどの把握を図ることしたい。



第 15 図 調査地位置図 (1/15,000)



第 17 図 土層柱状図 (1/40)

## 7 延命寺地区立会調査

調査地	長岡市小国町太郎丸・上岩田	調査面積	13,175m <sup>2</sup> (対象面積 13,175m <sup>2</sup> )
調査期間	平成 27 年 5 月 22 日～8 月 7 日	調査担当	新田康則

**調査に至る経緯** 県営は場整備事業上岩田地区については、平成 21・22 年度に試掘・確認調査を実施し、その結果をもって取扱い協議を進めた。保護層の設定等によって遺跡の現状保存が概ね図られこととなったが、岩田原遺跡範囲内において、記録保存を目的とする本発掘調査を行い、また、工事内容によって本調査実施を要しないと判断した範囲についても、全域立会調査を実施することとした。事業計画地は渋海川右岸の約 60ha に及ぶ。

西側の沖積地（上岩田工区）については、平成 26 年 5 月～10 月に立会調査を実施し、その結果を岩田原遺跡発掘調査報告書（長岡市教委 2015b）に報告した。本報告は、東側の台地（延命寺工区）における立会調査によるものである。

**調査地の概要** 調査地には延命寺が原遺跡・延命寺城跡・延命寺北遺跡が所在する。延命寺が原遺跡では、昭和 41 年 8 月、土地改良事業に伴って発掘調査が実施され、縄文時代晚期中葉を中心とする良好な土器群が出土している（小国町教委 1969）。延命寺城跡は小国氏の城館跡とも伝わるが、平成 21 年度試掘・確認調査（長岡市教委 2010）、そして今回の立会調査でも中世城館の痕跡を把握することは出来なかった。延命寺北遺跡は、段丘中央に貫入する開析谷の谷頭に立地する縄文時代の小規模な遺跡である。

**調査の方法と結果** 工事掘削が遺跡深度に到達する箇所のうち、本発掘調査対象外とした掘削幅 1 m 以下の水路部分（第 19 図①など）と、これに付随する掘削幅 1 m 超の集水橋部分（第 19 図③・④・⑤）、加えて、試掘調査で構と思われるプランを検出したが、遺物が出土せずに周知化を見送った範囲等を対象とした。原則として表土より下位の層を工事到達深度までバックホウによるすき剥ぎで調査を進めた。合計 26 箇所で立会調査を実施した結果、延命寺が原遺跡範囲内の 7 地点で縄文時代の遺物が出土、1 地点で縄文土器を作う土坑（3-1 排 SKI）を検出した（第 19～21 図、第 3 表）。

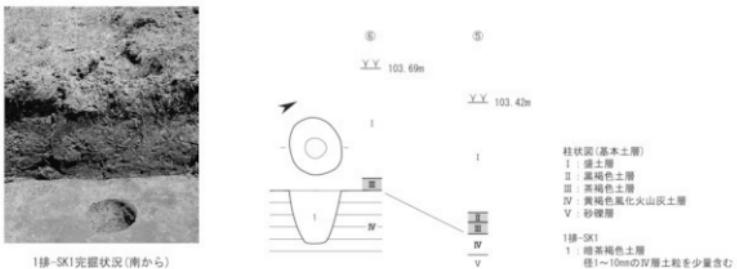
遺物の実測図を第 21 図に示した。1～8 は地点②（3-5 号排水路南側集水橋と隣接畦畔）からの出土。1・2 は三十稈場式土器。3 は内湾する口縁部に斜位沈線と刺突文を施す土器で、気屋式との関係が窺える。4 は南三十稈場式土器。縦位の条線文が施される。5～8 は晚期の粗製土器。9～17 は地点③（3-5 号排水路北側集水橋隣接畦畔）出土。9 は半截竹管による隆起線が施される。中期前半か。10・11 は後期の土器で、10 は L 縄文、11 は結節縄文が施されている。12～17 は晚期の土器である。12 は鉢形土器の口縁部。13 と 14 は同一個体資料で、2 条一単位の撚糸文を、口縁直下には左下がりに、胴部には右下がりに施している。17 では胴部下半まで撚糸文が確認される。18～27 は地点④（3-5 号排水路北側集水橋）出土。18～21 は三十稈場式土器。18 は橋状把手が欠損しているが、胴部に縦文と横位の沈線文が確認できる。22～26 は南三十稈場式土器。27 は後期中葉の土器。山形の口縁をもつ。28・29 は地点⑥（3-1 号排水路 SKI 上面）出土。いずれも三十稈場式の口縁部資料で、28 は口縁直下に加飾縦帶を巡らして胴部に撚糸文を施すもので、29 は口縁から加飾縦帶を垂下されている。30・31 は地点⑦（3-1 号排水路）出土で、30 は三十稈場式並行の粗製土器、31 は晚期の条線文土器である。32 は地点⑧で表面採集した土器。晚期の鉢形土器である。



第 18 図 調査地位置図 (1/50,000)



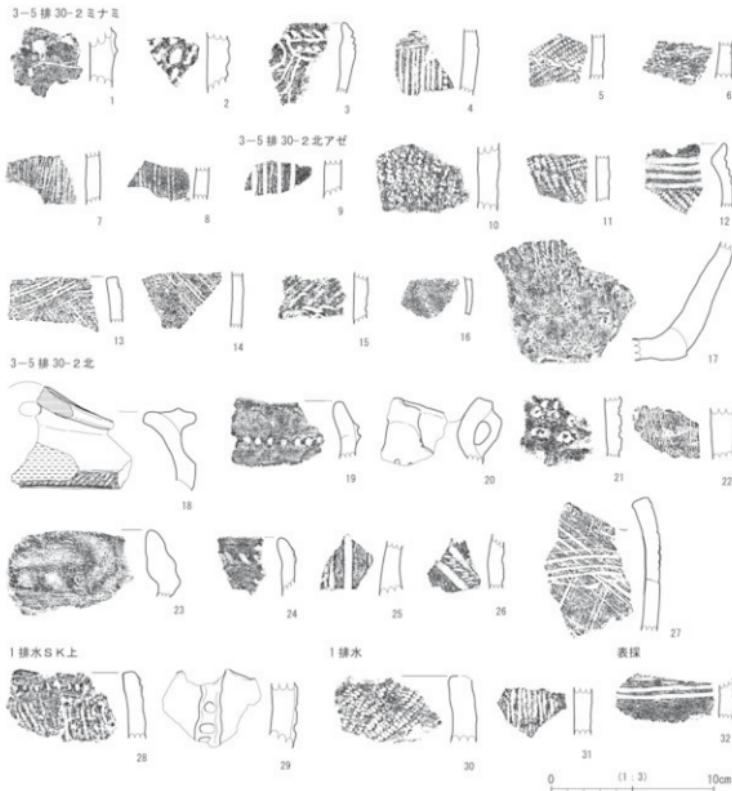
第19図 立会調査位置図 (1/5,000)



第20図 土層柱状図及び1排-SK1造横図 (1/40)

第3表 立会調査出土遺物一覧

地点	注記	内容	図番号
①	15延命寺3-5排30-3	縄文土器8(後常に切頭~前葉)・石器9(剥片類3・板状石器未完成)・石核1・磨石類5)	
②	15延命寺3-5排30-2ミナミ	縄文土器10(後常に切頭~前葉・後期)・石器18(剥片類3・板状石器2)	1~8
③	15延命寺3-5排30-2北アゼ	縄文土器117(後常に切頭~中葉・後期)・石器22(磨製石斧1・剥片類2)	9~17
④	15延命寺3-5排30-2北	縄文土器19(中期前半?・後常に切頭~中葉・後期)・石器16(板状石器1・剥片類7・磨石類6)	18~27
⑤	15延命寺30-2表採	縄文土器19(後常に切頭~前葉・後期)・石器4(剥片類4)	32
⑥	15延命寺3-5排30-1	縄文土器1・石核2(剥片類2)	
⑦	15延命寺3-1排SK上 15延命寺3-1排SK	縄文土器4(後常に切頭) 縄文土器3(後常に切頭)	28~29
⑧	15延命寺3-1排	縄文土器10(後常に切頭~前葉・後期)・石器3(剥片2・磨石類1)	30~31



第21図 土器実測図 (1/3)

## 参考文献

石坂圭介

2008 「三十編場式土器」 小林達雄編『総覧縄文土器』 小学館 619-625 頁

小国町教育委員会

1969 『縄文時代の延命寺が原』 小国町

小国町史編集委員会

1976 『小国町史』 本文編 牧野功平（小国町）

春日真実

1994 「越後における8世紀中頃の画期について」『北陸古代土器研究』第4号 北陸古代土器研究会 92-98 頁

2002 「古代古志郡の考古学的検討－在地勢力の動向を中心に－」『新潟考古学談話会会報』第24号 新潟考古学談話会 8-20 頁

北野博司

1999 「越後・佐渡の須恵器窯」『須恵器窯構造資料集1-出現期から8世紀中頃を中心にして-』 窯跡研究会 147-153 頁

岡南の郷土誌編集委員会

1985 『岡南の郷土誌』 岡南中学校後援会

五泉市教育委員会

1981 『五泉市文化財調査報告（2）山崎須恵窯址』 五泉市教育委員会

田中靖

2003 「第IV章2 出出土器について」『和島村埋蔵文化財調査報告書第14集 下ノ西遺跡IV』 和島村教育委員会 56-61 頁

中村孝三郎

1966 『先史時代と長岡の遺跡』 長岡市立科学博物館

長岡市

1992 『長岡市史』 資料編1 考古

長岡市教育委員会

1992 『長岡市内遺跡発掘調査報告書 石動地区 南原遺跡 植古地区』 長岡市教育委員会

1994 『南原遺跡』 長岡市教育委員会

2002 『長岡市内遺跡発掘調査報告書 千代栄町地区』 長岡市教育委員会

2006 『平成17年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』 長岡市教育委員会

2007 『平成18年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』 長岡市教育委員会

2008 『平成19年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』 長岡市教育委員会

2009 『平成20年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』 長岡市教育委員会

2010 『平成21年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』 長岡市教育委員会

2011 『平成22年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』 長岡市教育委員会

2012 『平成23年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』 長岡市教育委員会

2013 『平成24年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』 長岡市教育委員会

2014 『平成25年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』 長岡市教育委員会

2015a 『平成26年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』 長岡市教育委員会

2015b 『岩田原遺跡 一経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』

新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第104集 国道116号埋蔵文化財発掘調査報告書 梶子谷窯跡』 新潟県教育委員会

新潟県考古学会

1999 『新潟県の考古学』 高志書院

広井道・小熊博史

1999 『信濃川の歴史的意義』『長岡市立科学博物館研究報告』第34号 長岡市立科学博物館 55-82 頁

## 報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうしちねんどがおかしないいせきはくつちょうさほうこくしょ						
書名	平成27年度長岡市内遺跡発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	新田康則・山賀和也・鳥居美栄						
編集機関	長岡市教育委員会						
所在地	〒940-0084 新潟県長岡市幸町2丁目1番1号						
発行年月日	2016年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	調査期間	調査面積	調査原因	
いのむらとうせき 羽村遺跡	いのむらとうせき 新潟県長岡市乙吉町字羽村	152021	83	372658 1386345	20150421 20150421	—	遺跡分布調査
おぬめらとうせき 大荒川前田遺跡	おぬめらとうせき 長岡市大荒戸町宇都原504番地3	152021	224	372856 1384814	20150929 20150929	6.0nf	試掘・確認調査
すがむとうせき 杉木遺跡	すがむとうせき 新潟県長岡市成願寺町	152021	345	372644 1386311	20150427 20150427	16.3nf	試掘・確認調査
しらくらやかたあと 白骨跡	しらくらやかたあと 新潟県長岡市十日町宇前の橋	152021	138	372255 1386019	20151006 20151006	215.1nf	試掘・確認調査
えんめいのひはらいせき 延命寺が原遺跡	えんめいのひはらいせき 新潟県長岡市小国町太郎丸延命寺1706番地	152021	548	371649 1384227	20150622 20150807	13175.0nf	工事立会
ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
いのむらとうせき 羽村遺跡	遺跡	古代	墓体	須恵器	なし		
おぬめらとうせき 大荒川前田遺跡	遺物包含地	古代	なし	なし	なし		
すがむとうせき 杉木遺跡	遺物包含地	古代	ピット	なし	なし		
しらくらやかたあと 白骨跡	城郭跡	中世	龜・井戸	なし	なし		
えんめいのひはらいせき 延命寺が原遺跡	遺物包含地	縄文	土坑	縄文土器・石器	なし		

## 平成 27 年度 長岡市内遺跡発掘調査報告書

平成 28 (2016) 年 3 月 31 日 印刷

平成 28 (2016) 年 3 月 31 日 発行

発 行 新潟県長岡市教育委員会

印 刷 株式会社サンワプロセス

